

令和2年度すくすく泉事業 実績報告書(案)

(団体名：NPO 法人 いずみの会)

【事業名称】
「すくすく泉」事業
【事業目的】
<ul style="list-style-type: none">・ 保育・ひろば(一時預かりを含む)を2本柱として、地域子どもたちが地域みんなに愛されて育つ場をつくれます。・ 樹木に囲まれた自然空間や泉文庫の豊富な絵本等の蔵書を活かして子どもの感性を育み、そこで過ごす子どもにとって、楽しく豊かな原風景となる場をつくれます。・ 地域の中の多世代の交流を大切に、子育てを通してみんなが豊かな時を過ごし、子育ての不安感、負担感、孤立感を軽減し、相談しやすく、様々な子育て情報を得られる場をつくれます。
【事業内容】
<p>【子育てひろば事業】</p> <ul style="list-style-type: none">・ 乳幼児親子の日常的な居場所として、育児不安の支えとして、地域とのつながりの入り口として、誰もがホッとできる心地のいい場の提供。・ 双子、低月齢、特別な配慮が必要な子、転居間もない親子、外国人の親、祖父母育児、など、さまざまな育児のスタイルがあり、それぞれの抱える不安がある。どんな親子にも寛容な場であり、気軽に来てホッとでき、安心して子育てをすることで、心も体も健やかな子どもが育つ場の提供。・ 手作りや木の温かみのあるおもちゃで遊び、いずみ文庫でいい絵本に触れ、隣接の公園でのびのび外遊びをし、自然を身近に感じるなど、子どもたちが安全に楽しく過ごし、みんなで育つ場の提供。・ 親同士の自然な出会いや支え合いができるようなはたらきかけをし、孤立子育てからの脱却、共に支えあう子育てを促す。・ 発達に不安があり育てにくさを感じている親子も過ごせるインクルーシブなひろばのための相互理解を深める取り組み。・ 専門機関とのネットワークにより利用者のニーズに合わせたプログラムを企画。・ 地域情報がワンストップで手に入る、また、利用者のニーズに合わせて紹介し地域へつなぐ。内容によっては専門機関へつなぐ役割。・ コロナ禍の対応として、入場時のルール決め、清掃、消毒、ひろばの登録制など、安心して過ごせるように工夫。・ 地域他団体との協力体制によるオンラインでの講座やイベントを企画。・ 緊急事態宣言による閉所期間も、SNSや公園を利用し、つながりを絶やさない工夫。

【一時預かり事業】

- ・保護者の育児に伴う精神的および身体的負担の軽減のため、理由を問わない一時的な預かり保育を行う。（1～6 時間、0 歳は～4 時間）事情により緊急な預かりにも対応。
- ・以下の 3 点を重要な骨組みとした考えは一貫して変わらない。
 - * 命を守り無事にお返しする。
 - * 安心して保護者を待てるような子どもの心の安定。
 - * 安心して子どもと離れていられるような保護者からの信頼。
- ・コロナ禍の対応として、同時刻 5 名の定員を 3 名に減らし、早朝、夜間を時短、宿泊対応は休止など、制限をかけた上で、預かりが必要な親子ができるだけ利用できるように継続。

【小規模保育事業】

- ・保育の基本理念、基本方針および保育目標を柱として保育をした。
- ・保育と並行して新型コロナウイルスの感染防止および感染者がでたときの対応をした。

保育の基本理念基本方針

- * 一人ひとりの子どもを愛し、尊重します。
子どもが最善の利益とその権利を尊重され、心身共に健康で、未来を創造する基礎が育つよう、チームワークを活かして保育する。
- * 乳幼児期を豊かにするために家庭と連携します。
人間性の土台が育つ大事な時期として、それを十分認識して子育ての喜びを共有し、乳幼児期を豊かに生きるために保育者と保護者が連携していく。
- * 地域から生まれ、子どもをまん中に地域が支え合う関係づくりをめざします
地域の自然や様々な物的・人的資源、文化を保育に活かします。また、子育てを通して多世代がつながりを深める拠点となり、地域全体の福祉や家庭支援に寄与していきます

保育目標

- * 自分が好き、みんなが好きなこども
- * 心も体も健やかな子ども
- ・子ども一人ひとりの心と身体の成長発達を保障する保育を進める。
（今年度は配慮が必要な子どもが 1 名いた。関係機関と連携をとりつつ対応した）
- ・家庭との連携を密にとり、自我の目覚めと拡大期という成長の意味を伝えつつ、対応に苦慮する保護者の気持ちを支えながら、子育てを一緒に楽しめるようにする。また運営委員会で保護者代表として対等に意見を出す機会を通して、よりよい運営をつくる立場でかかわってもらう。
- ・多世代、地域の子育て家庭、近隣の園など、地域とのかかわりをひろげる。（今年度はできる範囲で行った）
- ・保育者の資質向上と保育の質を高めるための研修をする。
- ・常勤保育士の採用を進め、保育運営をスムーズに行えるようにし、働きやすい環境づくりを進める。

【新型コロナウイルス対応】

- ・緊急事態宣言下では、常勤職員を中心に、保育が必要な家庭の保育を継続。また、非常勤職員のほとんどが自宅待機となったが、自宅でできる仕事や研修をしたり、少人数で遊具の制作をするなど、仕事の継続を工夫した。

- ・会議や事務仕事などはできるだけリモートで行うような仕組みを整えた。
- ・消毒は厚生労働省のサイトを参考に、新型コロナウイルスに効果のある方法に変更した。
- ・玄関にゲートを作成。一時預かりの送り迎えは玄関で行うようにした。
- ・入口での検温、消毒を徹底。
- ・24 時間換気システム、窓開けに加え、新たに空気清浄機の導入もした。
- ・ひろばと保育室の動線を分けて、なるべく人の出入りを少なくした。
- ・保育室へは公園側を迂回して入るため、夜間の安全を考慮し、センサーライトをつけた。
- ・感染症が発生した場合のフローやマニュアルを作成。
- ・保育室では緊急メールのほかに、保護者と個別にメールをつなぎ、きめ細やかな対応ができる体制をつくった。
- ・ひろば利用を登録制とし、何かあれば連絡が取れるようにした。午前、午後で利用年齢を分けた。
- ・一時預かりは時短、定員を 5 名から 3 名にして密を避けた。

実際に年末に保育職員 1 名が新型コロナウイルス陽性となったが、上記の準備があったことで、スムーズに対応することができ、最小限の影響ですんだ。今後も、誰がどこでかかってもおかしくない状況がしばらく続きそうなので、より緊張感をもって感染をひろげない工夫をしていく。また、濃厚接触者が特定され、PCR 検査の結果が出るまで、感染者の情報の内容や伝える範囲について課題が残り、検討中。

【事業効果・波及効果】

【子育てひろば事業】

今年度は主に、「コロナ禍における、親子のストレスや孤立子育てに対する支え」、「学びや相談を止めないために、オンラインやSNSを活用した工夫」について意識しながら進めてきた。

「緊急事態宣言下の活動」

- ・4 月から 6 月中旬までひろば閉所。突然日常を奪われた利用者の戸惑いと不安に対し、いずみのひろばとしてできることとして、「いずみのハト時計」を行った。
 （「いずみのハト時計」雨天以外の毎日 11 時に公園側の門を開け、デッキを舞台にして、手遊び歌、紙芝居、絵本の読み聞かせ、人形劇などをする。一時預かりの子どもを対象だが、公園に遊びに来ている親子も自然に参加できるようにした。約 10 分。公園にバラバラにきていた親子が少しでもコミュニケーションをとることで、不安感や孤立感を和らげる）
- ・Twitter に親子で家で過ごすためのヒントをアップ。スタッフが自宅で動画を撮影。遊びやおやつなどの「小ネタ」をほぼ毎日提供。
- ・「境おやこひろば」や「みずきっこ」が企画した ZOOM を利用したオンライン親子ひろばに参加。閉所以来会えなくなっていたすくすく泉利用者の参加もあった。

「再開後のひろば」

- ・保健センターがいつも通り機能しなかったため、離乳食で悩む親が多くいた。そのため、コロナ禍での離乳食講座実現のかたちを模索していたところ、武蔵境エリアで活動する「境おやこひろば」とのコラボで、オンラインで実現させることができ、好評だった。

- ・上記離乳食講座の実現を経て、「境おやこひろば」とのコラボ企画を続けた。主に、すくすく泉がもともリアルでやっていた講座内容や進行を詰めることと、紙媒体でのPRなど。「境おやこひろば」が予約の受付、オンラインでの進行、ブログ発信を担当。市内でも活動エリアが離れていることで、より広範囲の親子に情報などを届けることができた。

「ひろばを安全で居心地の良い場所にする」

- ・新型コロナウイルスによって日常を奪われたストレスや、人との接触を避けることで、ちょっとした不安が解消されない状況がある。また、リモートワークなどで、父親の育児への関わり方に変化が見られるため、その情報をスタッフが拾い上げ、毎日情報共有をして、日々の声掛けやプログラムに活かした。
- ・スタッフは、コロナ禍においても安定して自然に存在し、不安を煽ることなく、また軽視することもなく、以前のままの家庭の延長のようにつづり、ときには甘えられる場所を意識して提供した。
- ・多くの企画が予定通りできなくなったが、例えばプールは出さずにデッキで水遊びができるようにしたり、ベビーマッサージは定員を半分に減らしたり、助産師さんの計測は15分毎の時間予約制にしたり、と、安心安全を考えながら工夫し、できる限り実現させてきた。
- ・月に2回の「こらぼの」（中町集会所 こらぼのコミセン親子ひろば）は、会場であるコミュニティーセンターが閉館していたため、9月からの再開。予約制となったせいか、第一子低月齢の利用が減った気がする。少ない人数で穏やかに過ごせるので、親同士のコミュニケーションも深く、雰囲気はいいように思う。

「多様な子育てを応援する」

- ・外国人の利用は、日常になりつつある。現在の利用者は日本語に不自由のない親がほとんどだが、生活習慣の違いや何かの手続きなどで不安なことがあると相談にのったり、他の親と繋いだりした。
- ・発達障害などにより、ひろばを利用しにくいと感じている人と、手助けしたくてもどう接したらいいのかわからないという人の、相互理解を深め、一緒に育ちあう場をつくるためのプログラムを企画し、オンラインで実現。発達と感覚の専門家による講座と、それを遊びに展開するおやこひろばをした。

【一時預かり事業】

- ・事前に面接や聴き取りをして登録をし、当日にも子どもの情報を聴き取り、安全安心な預りを目指してきた。ひろばの親子の中で、慣れない子どもを預かることから、その子、その子に合わせた預かりを丁寧に行った。
- ・担当スタッフが交代した時や、しばらく期間が空いての預かりもスムーズに行えるよう、情報を共有し、記録を残している。
- ・コロナ禍における対応のひとつとして密にならないように、同時間帯に3人までにすることで、ほぼ一対一対応になり、余裕をもって預かりができています。
- ・コロナ禍であってもニーズは変わらず、定員を減らしたこともあり連日予約で埋まっている状況。
- ・家族に体調不良の人がいる場合も、利用をお断りすることになった。預かり前の聞き取りもより細かなものにした。
- ・飲食は場所を限定し、子ども同士が対面にならないようにしたり、時間をずらしたりして対応した。
- ・緊急事態宣言下にはほとんどのスタッフが自宅待機となった中、保育士を目指し勉強した者が数名いたが、内2名が資格を取得できた。

【小規模保育事業】

- ・緊急事態宣言下にあっても、保育は数人が毎日利用していた。人数は少ないが安全な保育、家庭との連携、職員の安全確保、環境の充実等、保育を継続しながら、できることを工夫して進めた。
- ・4月より新規常勤の保育士1名が加わった。子どもの安心感が増し、保育が1日を通して安定した。常勤が担任として両クラスに配置されていることで、保育計画作成や離乳食の進め方など、給食やクラスの連携や決断がスムーズになった。他の職員にとっても安定して働きやすくなった。
- ・6年間積み上げてきた保育を、今年は立ち止まって見直した。具体的には、睡眠の考え方をより子どもや家庭に合わせた、クラス同士の連携で10人の子どもを保育者みんなで見ていく意識をもった、原則はあるが状況と子どもの育ちによって柔軟に保育できるよう現場の判断を尊重した、など。
- ・家庭との連携について
例年行ってきた4月の保護者会、6月の遊ぼう会が臨時休園や登園自粛などで実施できなかったが、11月にZOOMで保護者会を開催した。3月にも開催予定。また、保育参観と面談は、保護者の人数を1人に絞って実施した。おたよりでは育児のヒント等を伝えるトピックを新設した。12月から『おうち文庫』を新設して保護者むけの子育ての本を紹介した。保護者アンケートでも新型コロナウィルス対応についてのクレームもなく、一人ひとりを丁寧に保育することが好評価であった。
- ・運営委員会にて、保護者からオムツのシステムについて提案があり、検討して、来年度から希望者が日額で園のオムツを利用できる仕組みを作った。
- ・研修について
例年のような研修の機会がなかなか持てなかったが、4つの取り組みを進めた。
 - ① 臨時休園中に推奨する本やDVDなどを揃え、自宅で学べる時間をもてた。具体的な例を通して保育で大事にしたいことや、対応について共通理解が進んだ。
 - ② 今年度のテーマを『読み取ってみたら』とし、困ったな、どうしよう！イライラする！どうしてこうなの？と保育者が思った事例を持ち寄り検討した。それぞれの子ども状況に応じて、対応を考えていく機会となった。
 - ③ アドバイザーの先生の視察とひろば保育合同の会議を月1回行い、各セクションの長と担任が具体的な対応や現場の課題について話し合った。
 - ④ 外部研修の受講。研修を紹介し、それぞれの興味のある研修を受講した。市主催の全体研修はDVDもあったので、ほぼ全員が視聴できた。
- ・地域の親子の育児の不安や負担を軽減するための取り組み
新型コロナウィルスの感染も落ち着いてきた秋から、ベビーマッサージに参加した親子に保育園ツアーを実施した。実際のお皿や離乳食を見て、園児が食べているところを見ることができて好評だった。いずみのハト時計を小規模保育で企画し、ミニ獅子舞などを園児と地域の親子で見て伝統の音楽や行事に触れることができた。風を作りながら、ひろばの親子との何気ない会話ができた。
- ・非常勤の事務の負担が軽くなった。一方、常勤に事務や会議が集中するのは課題。また、昼の10分ミーティングの他に今年度後半から夕方にもできるだけシェアの時間をつくって、日々の保育の中で感じたことや今の個々の育ちやかかわりなどを具体的に話し合うことで、保育を共有し問題解決につながることもあった。

【達成目標に対する評価・反省】

●3 事業の連携で質を高める

新型コロナウィルスの影響で、合同の行事などがしにくい。また、職員の行き来は以前よりも減らしている。そのなかで何ができるかを検討して進めてきた。

- ・春の緊急事態宣言時には、保育、ひろばそれぞれに必要な手作りおもちゃの修理や作成などを手分けして進めた。
- ・ひろばのベビーマッサージと『保育所体験・赤ちゃん触れ合い体験』をセットにして実現させた。

- ・保育室監修の離乳食のしおりをつくり、ひろば利用者に希望により渡せるようにした。
- ・Zoomを使ったオンラインクリスマス会の企画で、保育室のペープサートを動画で提供。
- ・保育行事をデッキで行うことにより、ひろばの利用者も一緒に参加できた。
- ・毎年行っている保育室の保育士による「パパ講座」を、ひろばの「パパと外あそび」の企画と合体させ、外あそびの後の短時間でお話と、相談会を行い、好評だった。

●多様な子育てに対応できる施設にする

それぞれの事業で、外国人、発達障害、育児困難家庭などのケースに対応。（「事業効果・波及効果」参照）

●切れ目のない支援の一翼を担う

- ・低月齢の0歳児のためのベビーマッサージ、助産師さんと話すきっかけになる計測は育児不安解消の有効なプログラムのため、優先的に再開。

●地域全体で子育てするための連携

新型コロナウイルスの影響でほぼ中止となってしまったが、そんな中、ひろばの譲り合いの掲示「ゆずっちょ」を使って、地域のお年寄りが手編みしたベビー用ニットキャップをたくさん寄付していただき、希望のママたちに手渡せた。直接顔の見えないやり取りではあったが、ほっこりと温かな気持ちになった。

●支援者同士の連携

- ・子どもの発達障害の不安を感じる親子を、おもちゃのぐるりんと情報交換しながらサポートできた。
- ・3園合同研修会ですくすく泉公園での豊かな遊びについての研修を予定していたが、新型コロナのためできなかった
- ・感染対策についての各施設での取り組みを情報交換した。

●運営体制の安定化と次世代へのつなぎ

今年度、保育事業に8時間の常勤が1名加わり、新年度からは新たに2名の常勤を雇用予定であることは大きな前進である。また、非常勤スタッフ1名が保育士資格をとった。今後の事業継続を見通し、一緒にこの場をよくしていくための意見も出し合えるようになってきている。

●施設改善

入口のスロープに屋根がつくことになった。（3月完成予定）利用者のベビーカーが濡れなくなる。

【令和3年度以降の見通し】

新型コロナウイルスの感染防止対策をとりながら、状況に合わせて可能なことを探りつつ活動する。

【子育てひろば事業】及び【一時預かり事業】

- ・生活環境や、家族の状況に変化があった年、リモートワークで夫が家にいることで一定時間外に出ていかなくてはならない母子、逆に子育てひろばなどに出ていくのを止められている親子、不安が強く、家にもりがちな親子、離乳食が進まない、発育・発達が心配だが相談をしていない親子など、普段以上に支援が必要なケースに対し、私たちができることを模索していくことになると思う。
- ・感染の状況が落ち着けば、以下、令和2年度にできなかったことを実現させたいが、当初予定していた通りの内容は難しいこともあり、リモートなども併用しながらできる方法で進めていく。
- ・講座やお楽しみプログラムなどは、市内他団体などとコラボすることで、リアルよりも広い範囲で提供できるというメリットは今後も生かしていく。
- ・ひろばに来たくても来られない、発達に不安がある子とその保護者の存在を知ったので、そのための定期プログラムを実施。そこから自然にひろばへつながることを期待している。
- ・父親の育児参加のための企画をさらに進め、父親同士のなかまづくりのきっかけを加えたプログラ

ムを企画する。

- ・ 保育コンシェルジュや健康課、保健師、助産師会、市内子育てひろば拠点になどとの連携をさらに深め、具体的に利用者還元できるようにしたい。
- ・ 子育てひろばネットワーク東地区の連携を深め、コラボによる講座やイベント、合同職員研修などを各団体に提案したい。
- ・ 地域の力を活かす場面を増やしていきたい。特に大学生など若者の参加も機会を増やしたい。
- ・ スタッフの質向上については、オンラインを活用して、全体研修、ミーティングを続けていくほか、関連資格の取得を促すなどして多方面の専門性を引き続き高めていく。
- ・ スタッフの健康管理、場の消毒、換気などを徹底して、予約制や定員制を極力せずに、思い立ったらふと立ち寄れる安心・安全な場を、利用者とともに継続させてゆく。

【小規模保育事業】

- ・ 新たに常勤保育士が2名加わることで、子どもとの愛着関係を保ち、きめ細やかで安定した保育を目指す。
- ・ スタッフが個々の子どもの姿から保育理念に沿って考えを出し合える場を作っていく。新規採用者も含め、どのスタッフも安心して思ったことを出せるような雰囲気づくりをしていく。
- ・ A型に移行するため、シフト組などをスムーズに行い、休暇や休憩などもしっかり保障できるような体制にする。非常勤スタッフの保育士の資格取得をすすめていく。
- ・ アドバイザーの毎月の視察や会議、テーマをもった園内研修、またオンラインを活用してキャリアアップの研修や市主催の全体研修など外部に自ら学びに行く機会を作っていく。
- ・ 状況によるが、中高生対象の職場体験、『保育所体験・赤ちゃん体験』、ひろばと連携しながら、内容の充実をはかりたい。特に離乳食はお母さんにとって悩みの種であることがわかったので、実際の姿が見られる良さを活かして不安解消に貢献したい。
- ・ 近隣の園とは、合同研修会などを通して、子育てを共に学び合う関係づくりをしたい。特にすくすく泉公園での遊びの充実をはかりたい。